

令和元年度 シンポジウム 開催報告

こころをつなげて、四国はひとつ

「四国遍路を世界遺産に」国際シンポジウム

- 日時 令和2年1月25日(土) 13:15~16:30
- 場所 愛媛大学南加記念ホール(愛媛県松山市文京町3番地)
- 内容
- 基調報告
「四国遍路の顕著で普遍的な価値とは」
金田 章裕 氏(京都府立京都学・歴史館長)
 - 基調講演
「世界文化遺産の動向とアジアの巡礼」
ガミニ・ウィジェスリヤ 氏(ICCRM元プロジェクトマネージャー)
 - パネルディスカッション
「四国遍路の価値と世界文化遺産登録に向けた課題」
コーディネーター 稲葉信子 氏(筑波大学教授)
パネリスト ガミニ・ウィジェスリヤ 氏(ICCRM元プロジェクトマネージャー)
鈴木 地平 氏(文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室文化財調査官)
胡 光 氏(愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター長)
- 組織 主催 「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター
- 後援 徳島県、高知県、高知県教育委員会、愛媛県、愛媛県教育委員会、
香川県、香川県教育委員会

■概要

「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会は、令和2年1月25日(土)、愛媛県松山市の愛媛大学南加記念ホールにおいて、世界遺産登録に向けた国際シンポジウム「四国遍路を世界遺産に」を開催し、当日は約160人が参加した。

開催に先立ち、本協議会の「普遍的価値の証明」部会と愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センターとの間で連携協力協定が締結され、今後の四国遍路に関わる研究面での協力体制が整えられた。

シンポジウムでは、「普遍的価値の証明」研究会会長から四国遍路の「顕著な普遍的価値」の研究に関



する中間報告を行ったほか、世界遺産の専門家などを交え、近年の世界遺産の動向やアジアの巡礼や信仰との比較を踏まえて、四国遍路の特質や世界遺産登録に必要な「顕著な普遍的価値」について活発に意見交換が行われた。海外からの視点を交え、四国が一丸となって取り組む四国遍路の世界遺産登録推進事業について、改めて理解を深めていただく機会となった。



■ 関係者挨拶



「四国八十八箇所霊場と遍路道」
世界遺産登録推進協議会会長
佐伯勇人（四国経済連合会会長）

本協議会の佐伯勇人会長は、民衆の魂のよりどころであった四国遍路を「地域の宝」として将来世代に引き継ぐことは、デジタル社会に向かおうとする現代においてこそ重要な責務であると語り、今回の協定締結により、「連携協力関係を深め、世界遺産登録への弾みがつくことを願う」と挨拶した。

続いて、開催県である愛媛県の八矢拓副知事が中村時広知事の挨拶を代読し、国内暫定一覧表記載の文化遺産が残り少なくなり、見直しが期待される中、リスト入りにはさらなる機運醸成が重要としたうえで、「遍路文化の魅力を強力に発信し、世界遺産登録の実現につなげたい」と協力を呼びかけた。

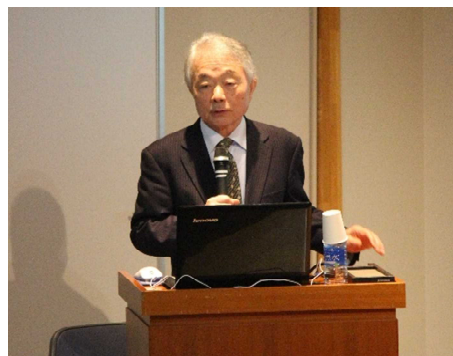
また、愛媛大学の大橋裕一学長は、昨年4月に立ち上げた四国遍路・世界の巡礼研究センターなど3つの地域密着型文系研究センターの活動により、地域文化の再評価や研究成果の発信を通じて地域の活性化に貢献したいとし、「連携協力協定の締結が世界遺産登録に向けた課題解決の一助になれば幸い」と述べた。

■ 基調報告

「四国遍路の顕著で普遍的な価値とは」

本協議会の「普遍的価値の証明」研究会会長である京都府立京都学・歴史館の金田章裕館長から、四国遍路の成り立ちや概要のほか、同研究会における検討内容の途中経過について報告いただいた。

四国の4ヶ国はもともと南海道の一部であり、都から来る官道も通っていた。時代によりそのルートは変化するが、「そのうち8世紀段階でできた四国を一周回る道を使っているのが四国遍路の元々の形と考えられる」と歴史的な成り立ちを説明。四国各地に遺されている本堂と大師堂がある札所の境内や、土道や石畳の遍路道のほか、道沿いに建てられた丁石や道標、お接待の場となった茶堂などを写真で紹介した。



京都府立京都学・歴史館 金田章裕館長

現在、研究会では、四国遍路の歴史を、①修行僧が海を隔てた四国の辺地で修行した時代（古代～中世）、②修行に広がり生まれる時代（中世末～近世初め）、③88の札所や番号など現在まで続くシステムが完成し、大師堂や道標など遍路を支える設備が充実した時代（近世～近代）、④交通手段や目的が多様化した時代（戦後～）という4つの時代区分で捉えることを試みている。特に③は確立期といえ、「1687年に大坂で出版された真念の『四国遍路道指南』には札所の番号や遍路の姿が確認でき、四国遍路の確立、定着に大きく寄与している」と説明した。

また、世界遺産としては、17世紀後半に88の霊場を回る巡礼として確立し、18世紀になると札所に大師堂が整備され、遍路道には道標や丁石、接待所などが建てられ、色々な要素が出そろふことに加え、「大師信仰をベースに、宿や食事などを無償で提供するお接待によって遍路者が支えられ、地域の人たちも善行を施すことで救われるという双方の意図がうまく成立する状況ができていたことが特徴となり得る」と評価した。

最後に、四国遍路の「顕著な普遍的価値」について、「四国の地と密接に結びつき、巡礼者と地域の人々の相互に救いをもたらしながら存続する四国遍路は、今も良好にその伝統を伝え、地域社会に支えられて発展した世界でも稀な、多様な個人を救済する信仰の形を伝える証拠」という現時点の案を紹介し、「世界や日本のほかの巡礼との違いや特徴をどう説明するのかなど、引き続き検討すべき課題が残されている」と締めくくった。

■ 基調講演

「世界文化遺産の動向とアジアの巡礼」

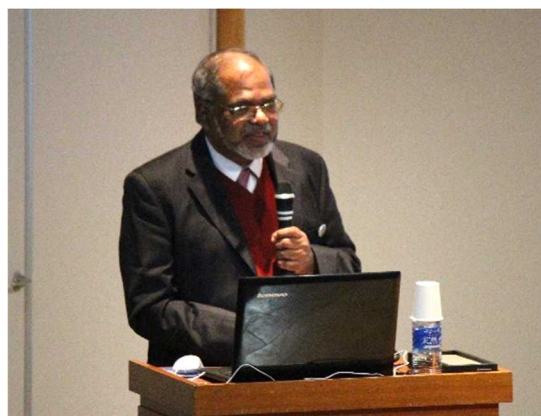
ICCROM 特別顧問を務めるスリランカのガミニ・ウィジェスリヤ氏から、世界遺産に関わってこられた経験を踏まえ、最近の世界遺産の考え方や、アジアを中心とする世界の巡礼の紹介、四国遍路の取組みの課題について講演いただいた。

巡礼とは、一般的には宗教目的で、神聖とされる特定の場所を求める旅であり、巡礼者や、寺院等の遺跡、目的地、巡礼路、宗教的祭礼等の無形的要素などで表現され、認識される。現在、世界文化遺産のうち72件が巡礼または巡礼者という表現に触れており、タイトルに道や巡礼路が含まれるものが6遺産あるという。

世界遺産登録のプロセスについては、「良い準備チームと、十分な財源と時間が不可欠」とし、近年は特にコミュニティを巻き込むことが重視されているほか、イコモスの年次報告書や作業指針の改訂内容などを把握し、推薦書作成の際はこれらにしっかり対応する必要があると強調した。また、管理の面では、緩衝地帯を超えた範囲まで遺産影響評価が求められており、「地域社会への利点なども視野に入れた仕組みを構築することが重要」と指摘した。

世界遺産に必要な「顕著な普遍的価値」は、国境を越えた形で認められるものでなければならず、「巡礼によってどのような変化が起き、世界的なレベルでどう展開し、どんな有形・無形の遺産によって認識されているかが非常に重要なポイント」として、アジアの巡礼であるチベットのカイラス山やスリランカのアダムスピークを例に、仏足跡を刻んだ石や、ルート沿いの様々なモニュメント、アダムスピークへの巡礼を描いたタイの寺院壁画などの物証を紹介した。

最後に、四国遍路は世界的に見ても非常に素晴らしい巡礼路で、この島の文化を変えてきたものと高く評価した上で、「世界に語るべき物語、メッセージを考えることが大切」と語り、様々な目的の巡礼があると同時に、巡礼者を助けるコミュニティの側にも功德、恩恵があることから、「何度も霊場を回るといところが特徴ではないか」と指摘した。また、「88ヶ所ある霊場を強調しすぎるのではなく、霊場は以前から存在したが、後から巡礼が始まったことで生成されたものは何か、それを強調すべき」として、巡礼の結果として生まれた新しい寺院や土地の活用、集落、建造物、祝祭などの有形・無形の資産をつなげ、その価値を訴える必要があると提言。今後に向けて、「やるべきことは多いが、外部から様々な助言をもらうことが大切」と意見を頂いた。



ICCROM 元サイトユニットプロジェクトマネージャー
ガミニ・ウィジェスリヤ氏

■ パネルディスカッション

「四国遍路の価値と世界文化遺産登録に向けた課題」

報告・講演を踏まえ、四国遍路の価値や今後の取組みに向けた課題について、パネリスト各氏による活発な意見交換が行われた。

愛媛大学の胡光センター長は、辺境の島国という地形が円形の巡礼を生み出し、終わりが無い巡礼という特徴につながっ

たことや、いわゆる庶民と呼ばれる多様な人々が巡礼の主体であったこと、札所には本堂のほか大師堂が必ずあること、四国内の地域の接待が巡礼を支えたことなどを特徴として紹介し、「遍路者も接待する人も救われるということが背景にある」と語った。また、「弘法大師やお接待のほか、世界に発信するメッセージをもう一つ加えていく必要がある」として、「四国遍路が盛んになった江戸時代は、いわゆる庶民が成立していく時代であり、その一つの要因に弘法大師信仰や四国遍路があると考えると面白いのではないか」と述べた。

文化庁の鈴木地平調査官は、近年、信仰に関わる資産が数多く登録されている傾向を紹介し、四国遍路については、明確な目的地がない周遊型の巡礼であることや、様々な階層の人々が巡っていたことに加え、「特定の教祖や経典・布教者がなく、信仰だが宗教とはいえないところがある」ことを興味深い観点として挙げた。接待については、「接待を受ける遍路者の側が地元にもどのような影響を与えたのか、来る側と迎える側の相互の交流や影響にも注目したい」と提案し、「日常に溶け込んでいる当たり前の道や道標、お寺などに特別な価値があると思って、ぜひ大事にしてほしい」と語った。

基調講演を行ったガミニ・ウィジェスリヤ氏は、なぜその遺産が重要なのか問い直すところから始め、世界にとって共通した重要性があるかを登録基準に照らして考えることの大切さを強調した。また、世界遺産は不動産を対象とすることから、「既存の寺院を巡るようにして始まった遍路から何がもたらされ、どんな新しい部分加わったか、それを表す物理的な証拠を注意深く探さなければならない」と指摘し、四国遍路について、「まさにひとつの大きな文化を築いてきたという印象を受ける。今あるものとの繋がりを示す要素がきっと見つかると思う」と期待を述べた。



コーディネーターの稲葉信子氏



左から、パネリストのガミニ・ウィジェスリヤ氏、鈴木地平氏、胡光氏

コーディネーターの稲葉信子筑波大学教授は、「出発点は皆さんそれぞれの考える四国遍路の価値の中にある」とした上で、世界遺産登録のためには、世界の人々の心に響く「価値」、大師堂など四国遍路の価値を支える「物証」、札所や遍路道、接待所や道標などの物証を守り、価値を維持していく「地元の心構え」の3つが大事であると説明。「巡礼」という言葉が適切か、お接待をどう位置付けるのかなどを考え、「四国という島で、江戸時代という庶民文化の中だからこそ生まれた宗教でもないかもしれないもの、これが何かが見つかれば、四国遍路を世界遺産として推薦していける」と総括し、遍路の文化や価値を地元でも見つけていってほしいと語りかけた。